第 2 回フレックスコミックス異世界マンガ作画大賞 課題作品 1（男子向け）

◆概要
異世界へと渡ってきた尾妻連太郎。知る人ぞ知る冒険者として名を上げ、20 余年の年月を経て、この国いちばんの遊興街・ヒエロで娼館の支配人となっていた。
今日は四年に一度の逢瀬、娼館から遠く離れて暮らすエルフ族の長であり、妻のミトランシェが街にやってくる。彼女と交わした唯一の誓約にして聖約。それは四年に一度の夜の持て成しで、必ず彼女を満足させること。

◆キャラクター設定（下記 3 名のキャラクターデザインを作成して下さい）
○尾妻連太郎（おずま　れんたろう）
男性、175cm、40～42 歳。
職業：娼館の支配人。
特徴：普段は飄々として掴みどころがないものの、義理人情に厚く仁義を重んじる性格。異世界転移してきて数十年、江戸弁で話しているが過去の記憶は失くしている。娼婦は幼少の頃オズマに保護された子が多く、彼女たちからは父親のように慕われている。

○ミトランシェ
女性、身長は小柄、年齢不詳（外見は 18 歳前後）。
職業：妖精族でも最大数を誇るエルフ族の長。オズマの妻。
特徴：目が飛び出るほどの美女、もしくは美少女と形容しても遜色がない外見をしている。感情の起伏は乏しいが、オズマには一途で嫉妬深い。夫であるオズマと会えるのは四年に一度の蒼月祭の晩だけ。

○マリエ
女性、21～23 歳（ミトランシェよりお姉さんに見える）
職業：高級娼館『幻翠苑』の女主人。オズマとミトランシェの娘でハーフエルフ。
特徴：黒曜鳥のような艶のあるドレスに、肩から長い緑の髪を流した何とも妖艶な雰囲気の女。長い銀煙管が彼女のシンボル。母譲りの美貌を受け継いでいる。若いながらも他の娼館主人たち渡り合うために、度胸の良さだけでなく化粧や道具で化けることに余念がない。

◆舞台設定

〇娼館：離れと中庭を囲むようにコの字型で店は建っている。中庭には井戸や丸井池があり、その周辺には真っ白な花（皇帝ダリア）が咲き揃っている。

建物入り口は二つ、左右に分かれた暖簾をくぐると脱衣所、そして浴室の引き戸を開けるとおそらく大陸全土でもここにしか存在しない巨大浴場が現れる（柱や天井には精緻な彫刻が施してある）。湯殿を出て横の通路から奥へいくと娼館の大食堂にたどり着く。たくさんのテーブルと椅子。壁一面にはステージがあり、二階へ向かう大きな階段、こちらにも広い踊り場がある。そして広間の中心にはオープンキッチン型の調理場が設備されている。

◆課題小説

（以下から一部シーンを抜粋して、マンガ 4-8P 分の完成原稿を仕上げて下さい）

　不意にぐっと顔を掴まれて前を向かされた。
　斜め下から、こちらのエルフが俺を見上げている。

「他の娘を見ては駄目」

「……ああ、分かったよ、ミトランシェ」

　やれやれ、こっちはこっちで嫉妬深いのは相変わらずだ。
　まあそれもこれも四年に一度で我慢してくれるってんなら、こちらが贅沢言う義理はねえけどよ。

　ミトランシェの肩を抱き寄せて、俺は背後を振り返る。　いつもは明りが絶えない店は、誰もが出払っているいるためひっそりと佇んでいた。
　蒼い月に照らされるそれは、普段の猥雑さも消し去り、いっそ荘厳に見える。
　だから俺は言ってやったさ。

「ここが俺の城で、おかげ様でいまだ健在だ」

「オカゲサマ……？」

「要はみんなの力を貸してもらってってことさ。……おまえさんも含めてな」

　くしゃくしゃっと昔のクセでミトランシェの髪をかき回してしまう。
　しまったかな？　と思ったけれど、彼女はすっと瞼を閉じ、ますます腕に身体を絡めてきた。遠い深緑の匂いを嗅ぎながら、俺は彼女を城の中へと誘う。

　まず向かうのは浴室で、今日ばかりは完全に貸切。
　彼女が温泉を堪能して身体を洗っているうちに、俺は手ずからキッチンで料理を作る。酒の用意もたっぷりと。
　風呂上りの彼女を従えて向かったのは俺の私室で、そこでゆっくりと喰って盃を傾ける。

　積もる話もあるはずだが、強いて話題を振ろうとは思わない。
　妖精族ってのはとにかく気長だ。同じ大樹の枝に丸三日ほど腰を降ろしていても、まるで退屈しないとか聞いたことがある。
　人間が持つものとは、物事の尺度が違うのだろう。
　だからといって決して分かり合えないわけでもない。

　あらかた飯を食べ終えて、彼女は言う。

「……美味しかった」

「そうかい」

　俺はホッと胸を撫で下ろす。
　四年に一度の夜の持て成しで、必ず彼女を満足させる。
　俺がミトランシェと交わした唯一の誓約にして聖約だ。
　それを忘れて反故にしたとあっちゃあ、ガチの本当＜マブ＞で俺はこの世からおさらばしていただろう。

　気づけば、目前にミトランシェの顔があった。
　ついと唇を押し付けられる。

「おいおい、もう酔ったのかい？」

　俺はやんわりとかわそうとしたが、思いのほか彼女はぐいぐいと来る。
　ちっこい身体に抗いがたく、いつの間にか俺はベッドの上。

「わかったわかった。でもちょいと待ってくれ。俺も風呂入ってくるからよ」

「……構わない」

　そういって、俺の下服ズボンの帯に手をかけるミトランシェ。

「……初めての時のあなたは、そのままだった」

「って、おめえ、そんな昔のことを…」

　肌衣シャツの前を開く華奢な手を取り、俺は身体を入れ替えて彼女に覆いかぶさる格好になる。

「……生憎と俺も齢を喰っちまった。おめえを満足させられる自信はねえぜ？」

　するとミトランシェは少女じみた仕草で笑った。初めて会った時とまったく同じ表情だ。

「頑張って。それは、あなた次第……」

　耳元でささやかれた。
　何故か気恥ずかしくなり、俺は彼女を抱きしめたままベッドへと突っ伏す。

　静かな娼館の夜は更けていく。
　階下で若い娘の嬌声が聞こえたような気がしたが、御愛嬌だ。

＊＊＊

　蒼月祭から五日ほど経ち、街もようやくいつもの落ち着きを取り戻してきたころ。

「旦那。お客人ですよ」

「……誰でえ、こんな時分に？」

　サイベージ[*]の声に、俺は露骨に不満の声を上げた。

---

[*] サイベージ…痩身で風呂衣服の男性、借金のカタにタダ働きさせている冒険者崩れ。

　時刻は昼になろうとする直前。
　だがそれは世間的なもので、夜を徹して営業する娼館にとっちゃあほとんど早朝みたいなもんだ。
　まだ重たい瞼をこじ開け、どうにか身形を整えていると、許可も待たず部屋の扉が開く。
　入ってきたのは、まるで黒曜鳥のような艶のあるドレスに、肩から長い緑の髪を流した何とも妖艶な雰囲気の女だ。

「……マリエか」

　俺は驚きの声を出さずにはいられない。

　『幻翠苑』と呼ばれる娼館を切り盛りする女主人マリエ。
　とにかく質の高い娼婦を揃えて、生半な小金持ちは相手にしない高級店。
　看板には絶世の美貌を誇るハーフエルフを抱えた、いわば同業者だ。

　マリエは、案内してきたらしいサイベージを外に出るように顎で指し示す。
　弾かれたようにサイベージは部屋の外へ消え、扉が閉ざされた。

「おめえ、何しにきやがった？」

　俺の質問に、女主人は答えない。
　薄く笑うと、マリエは、彼女のシンボルともいえる長い銀煙管を桃色の唇に咥えて煙を吸い込み———たちまちむせ返る。

「ほら、無理するなって」

「もうッ！　三回に二回は上手くいくのッ！」

　俺の呆れ声に、涙目の蓮っ葉な声が応じた。
　そのまま近くのソファーに乱暴に腰を降ろす仕草なんぞ、小娘のまんまだ。
　思わず俺が笑っていると、マリエのやつが銀煙管を突きつけてくる。

「とにかくッ！　五日も経つのにお礼一つ寄越さないってのはどういうこと！？」

「あん？　てめえんとこで捌けねえ客を廻してきたクセになにいってやがる」

「そんなことより、今年の蒼月祭が四年に一度の約束って忘れてたでしょー？」

「……っ！　ばっか、おめえ、そんな大切なこと忘れてるもんかよ！」

「前日にもなって、大慌てて街中の花屋からトレクサを物色しまくってたのは誰だったのかなー？」

　小憎らしい口調でさえずるマリエを、俺は睨みつけた。
　だが一蹴するには、彼女の言は図星に過ぎる。
　俺は頭をバリバリと掻いて、非常に、本当に非常に業腹だったが口を開く。

「その、まあ、なんだ。……おかげで助かったよ」

　一瞬マリエはきょとんとし、それから盛大に足をばたつかせて笑い始めた。
　その仕草はドレスから剥き出しの太腿が見えるくらいで、俺は顔を顰めている。

「ひーひーおかしー！　やっぱり忘れてたんだねー！」

　さんざんとゲラゲラ笑い倒してから、マリエはまたもや銀煙管で一服。
　今度は上手く吸い込めたらしく、唇から細く煙を吐き出してこっちを流し目で見てきやがる。

「まあ、下手を打てば、あたしのケツにも火が点くことになりかねないからねー」

　伝法くさい口調でそんなことをポツリという。

「まったくなあ……」

　しみじみと同意してから俺が苦虫を噛み潰したのは、あっさりと賛同してしまった迂闊さと、彼女の言葉づかいと態度の生意気さにだ。

「っていうか、そんな身体に悪いものやめちまえよ」

「これがないと同業者の連中に舐められるでしょー！」

　銀煙管を胸に抱くようにしてマリエが「いー！」と歯を剥いてくる。

　まあ、一理なくもない。

　今をときめく幻翠苑の女主人が、まだ２０歳をいくらか出たばかりの小娘であることなんざあ、お釈迦さまでも分かるめえ。
　そんでいて、この界隈の娼館の百戦錬磨な主人どもと五分に渡りあってきているんだから、なんともはや。

　もちろん度胸が良いだけじゃ勤まらない話で、本人も化粧や道具で化けることに余念がない。いわば張子の貫録ってわけだが、結局のところ、マリエも言った通りこの業界も舐められたら終わりだ。
　そのくせに、俺に対するこの舐め腐った態度はどういうワケだ？

　まあ、種を明かしちまえば、幻翠苑の出資者は俺だ。
　この街に店を構えるに際し、大衆志向の店と高級志向の店とどちらにするか悩んでみたが、俺は大衆向けの方が肌に合う。
　色々と落ち着いて、いざ二号店ということで高級志向の店の方を作ってみた。そっちはマリエに任せてみたところ、どうしてなかなか才覚があったらしい。
　そういや、もともとマリエも娼館を運営したいってから、二つ目を作ったんだっけかな？　まあ、今となってはどっちでもいいか。

「さて、わざわざご足労頂いたのは申し訳ねえが、礼は言ったぜ？　そろそろお前もヤサに戻って夜の準備でもしろや」

　俺がそう告げると、マリエは露骨に眉根を寄せた。

「言葉なんてタダ同然でしょ？　ちゃんと形で欲しいんですけれどもー？」

　俺は深々と溜息をつく。

「案の上、タカリに来たってわけか」

「タカリだなんて人聞きの悪い。おねだりって言ってくれない？」

　椅子に腰を降ろす俺の背後に回りこんだマリエは、左手の人差し指でつーっと俺の肩あたりをなぞる。

「やめろ気色悪い。……で？　今度は何がご所望なんだ？」

　彼女の右手に持つ銀煙管をぼんやりと見つめながら言った。これも俺が贈ったものだったが、今となって別のものにしときゃ良かったと悔やんでいる。

「上限は？」

　マリエはにっこりして言う。

「まずは欲しいものを言え」

　仏頂面で俺。

「もう。なんでそんなにツレないのかなー？」

　背後からしゃなりと両腕が前に回ってくる。顔が近い。マリエの吐息が俺の頬をくすぐる。

「もっと仲良くしましょ？　お・と・う・さ・ん」

　緑色の髪が零れ、尖った形の良い耳が覗く。

「は〜〜。迂闊にガキは作るもんじゃねえなあ」

「その台詞。母さんに伝えても良い？」

「……なんでも好きなモノを持っていけ、このべらぼうめ」

「ありがとう、おとーさーん！」

　抱きついて来ようとするマリエをどうにか躱し、俺は苦い果実を丸かじりしたような顔をしていたことだろう。